

令和元年6月11日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K01650

研究課題名(和文) スポーツにおける感性論の展開

研究課題名(英文) development of kansei theory in sports

研究代表者

内山 治樹 (Uchiyama, Haruki)

筑波大学・体育系・教授

研究者番号：00168717

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、個人を超越した「チーム」なる存在者を主体として存立する協働行為の指針の究明が試みられた。考察の結果、チームの勝利は、「チーム・パフォーマンスの向上が図れるか否か」と「個々の競技者を満足させられるか否か」という2つの判断基準と「『自分の才能を活かせるか否か』という価値判断基準によって蓄積された個人の資産は、個人に不可侵の権利として帰属するのではなく、必要とする度合いに応じてチーム全体のために利用されなければならない」という規範的原理によって支えられ秩序づけられていると結論づけられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、チームの勝利には、普遍妥当な価値判断基準とそこに内在する法則である規範的原理が重要な役割を果たしていることを、また、チームスポーツにおける「正しい」協働行為は2つの判断基準とそれを支える規範的原理によって支えられていることを明らかにした。

その成果は、チームスポーツにおける、競技者同士、競技者とチーム、競技者とコーチという関係において生起する種々様々な実践上のコンフリクトの解決に貢献するばかりか、競技力の構成契機である身体性と知性の相互作用を統御する重要な能力である感性をめぐる議論の新たなパラダイム展開を促すことで、改めてチームにおける競技力の内実究明に貢献すると言える。

研究成果の概要(英文)： The purpose of this paper was to clarify guideline for existent cooperation as an entity known as a "team" that transcends the individual. Result of the study were as follow, it was concluded that the victory of teams are supported and ordered by two criteria: "whether or not team performance can be improved," and "whether or not individual athletes can be satisfied" and normative principle in that "personal assets accumulated through standard value judgments of 'whether or not personal talents are utilized' do not reside with the individual as a right of nonaggression, but that must be used for the team as a whole in accordance with its needs."

研究分野：スポーツ科学

キーワード：感性 競技者 チーム コーチ バスケットボール コーチング

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

一般に、競技スポーツにおける最大且つ唯一の目標は、計測や採点や得点によって明示される「強さ」という卓越性の比較を通してゲームに勝利することである。その実現のために、コーチは、身体に可能態として内在している諸能力を媒介にすることで、「競技者をして、まず、当該種目の身体技法の体系に『馴致』せしめ、次に、現にそこでプレイするレベルを不断に相対化させ、絶えず現状から『超越』せしめて新たな次元のパフォーマンスの獲得」(内山, 2013)へと先導する役割を担っている。一方、その過程において競技者は、プレイ遂行の原動力であって固有の規範的原理である「積極的自由」に支えられ、「自分の才能を活かせるか否か」という価値判断の基準に従って自身のパフォーマンスを発揮していくことになる(内山, 2014)。

しかし、「積極的に自由を揮う能力の向上に努める競技者」(内山, 2014)と解される「自律した強い個」であっても、チームスポーツの場合、一人ひとりがこの基準を勝手に振り翳し傍若無人の如く振る舞っていたのではチームとして勝利することは困難である。チームの勝利は競技者個々人によって遂行されるパフォーマンスの連携と連続を通して達成されるとはいえ、「プレイヤーたちの個々のパフォーマンスだけで複雑多様なゲーム状況を打開することなど不可能である」(内山, 2004)という言明からも窺えるように、「個人の能力はチームという集団において、チームとともにしか発揮できない」からである(Stiehler et al., 1988)。

翻って、こうした事態は、競技者には固有の規範的原理である「積極的自由」に支えられ「自分の才能を活かせるか否か」という価値判断の基準に基づくパフォーマンスが存在する一方で、チームが生成するパフォーマンスの総体である「チーム・パフォーマンス」(内山, 2001)は競技者のそれとは異なる次元での基準に拠って為されているのではないかと、また、価値判断の基準に内在する法則であり「判断の土台」(Schön, 1983)となる規範的原理は、チームにおいても「異なる価値観や利害を有する競技者が共通に奉戴し得る道標として」(内山, 2014)存在するのではないかと、という問いを生じせしめる。

では、チーム・パフォーマンスを発揮する原動力と考えられる「チームに固有の価値判断の基準」とそれを支える「規範的原理」とは何で、どうしたら対象化できるのであるか。その際、「チームが最善に機能するためには、チームが採るプロセスについての科学的且つ実用的な理解に基づいた実践上の指針 practical guideline が必要である」(West, 2012)という言明は、その分析視座の設定にかかわって重要な視点を提示している。なぜなら、「チームが最善に機能する」ことで実現される「勝利」に不可欠な「実践上の指針」は、例えば、1990年代にNBAを席卷したシカゴ・ブルズのようなトップレベルのチームにも存在したであろう「協働のための原理」というべきものであり、それはまた、どのレベルのチームであっても、個々の競技者が「プレイ遂行の際に何を信じて何に対して努力を払うかが望ましいかを決定する」際に、その決定を支えて秩序づける「チームに固有の価値判断の基準」を内包していると考えられるからである(内山, 2014)。

一方、その「基準」や「原理」は、運動形式に基づき可能態を現実態としての運動形態へと顕現せしめる身体性、運動形態と身体能力の馴致と超脱を図らんがための推理と制作というプロセスを駆使せしめる知性、そして、それらの相互作用を統御する感性、という三つの能力から成る「複合的構成体」たる「競技力」の中でも、「価値判断にかかわる能力」である「感性」に直結している(内山, 2009a)。

このことから、チームによって遂行されるパフォーマンスが普遍妥当性を有する判断基準と規範的原理に基づいていることを、「価値判断にかかわる能力」である「感性」に定位して明らかにできれば、前述した競技者について言及された省察を止揚することで、チームの戦い方に

「いつでも的」な一定の客観的妥当性を有する「指針」を与えることができるのではないかと考えられる。それに加えて、「競技者をコーチが勝利の実現に向けて先導すること」と規定されるスポーツにおける「コーチング」は、競技者に限らずその集合体としてのチームに対してもなされ得るものであるが故に、チームを先導するコーチの「強制力」の行使の仕方にも貢献するであろう（内山，2013）。転じて、このことは、コーチの感性に基づき、チームという全体において競技者という部分をどのように正しく機能させたら勝利できるかを問うことでもあって、この問いは、「部分と全体」に関する論理的・存在論的研究である「メレオロジーmereology」（斎藤，2009）の応用議論につながっていく可能性をも有しているのである。

2．研究の目的

本研究は、競技力を構成する契機の1つでありながら、他の2つの契機、すなわち、身体性と知性を統御する上で重要な役割を果たしている「価値判断にかかわる能力」である「感性」に着目し、他と比して最も複雑な特性を有するバスケットボールを対象に、競技力の製作者として未だ解明がなされていないチームとコーチの価値判断の基準と規範的原理の抉出を試みることで、競技者、チーム、コーチの相互作用から成るチームの戦い方に、いつでも的客観的妥当性を与え得る「実践上の指針」の究明を目的とした。

3．研究の方法

日・独・米のチームスポーツやバスケットボールならびに感性に言及している文献を改めて収集し、それらの精読を通じて、「チームにおける感性」の内実を分類・整理・分析することで概念化ないし定式化を図ることとした。具体的には、バスケットボールの競技力を規定する「スポーツ構造」を構成する上で最も重要な価値判断における基準としてシステムを構成する「感性」という契機を、「価値判断にかかわる能力」としての「感性」は個々の競技者だけでなくチームにおいても存在し、さらに、その感性は、競技力の構成契機である身体性および知性と相互に関連することにより、チームのパフォーマンスを決定づける重要な役割を担っている、という観点のもと、「チームとして普遍妥当な価値判断の基準と規範的原理の究明」を通して「チームにおける感性」を分析・考察した。

4．研究成果

本研究は、「価値判断にかかわる能力」である「感性」に着目し、他と比して最も複雑な特性を有するバスケットボールを対象に、競技力の製作者として未だ解明がなされていない「チーム」と「コーチ」の価値判断の基準と規範的原理の抉出を試みることで、すでにその解明を終えている「競技者」と併せて、チーム、コーチの相互作用から成るチームの戦い方に恒常的な客観的妥当性を与え得る「実践上の指針」を究明することを目的とした。この目的を達成するために、この3年間、日・独・米のチームスポーツやバスケットボールならびに感性に言及している文献とそれらを基礎づける外延的な文献の収集に努め、それらの精読を通じて、まず「チームにおける感性」の内実を分類・整理・分析することで概念化と定式化を試みてきた。

しかしながら、これまで上記「チームにおける感性」は脱稿し投稿したが、現在、審査中である。また、「コーチにおける感性」には取り掛かることができず、当初予定していた「競技者」「チーム」「コーチ」それぞれを「競技力」の製作者とし、それら3者から成る「スポーツにおける感性論」という新たな地平の全面展開までには至らなかった。

なお、チームやコーチの「感性」にかかわって重要な意味を持つ「コーチング」の学的基礎

づけについて国際的な評価を得るために行った国際誌投稿は不採択となったが、目下修正中であり再投稿を行う予定である。また、外延的事項とはいえ、本研究を基礎づけるバスケットボール競技やコーチングにかかわる成果は、『体育学研究』をはじめ他の全国誌に原著筆頭論文を2編に表れている。さらに、第68回体育学会(静岡大学)での「キーノートレクチャー」(「コーチングの本質を問う コーチの根源的役割に着目した原理論的アプローチ」)の演者としての指名、第4回日本バスケットボール学会(立命館大学)で「基調講演」(「バスケットボール学における「知」の射程 「感覚・知覚」から「理性・思惟」による「認識」へ」)の依頼など、これまでの研究での成果は、体育・スポーツ科学の研究領域において高い評価を得ていると言える。

5. 主な発表論文等

- ・内山治樹・池田英治・吉田健司・町田洋介・網野友雄・柏倉秀徳：バスケットボール競技における「ゲームの流れ」と勝敗との因果関係に関する研究：4つのピリオドの相互依存関係に着目して．体育学研究，63(2)：605-622，2018年．(査読有)
- ・内山治樹：バスケットボール学とは何か その学問性と学的基礎づけ ．バスケットボール研究，4：1-12，2018年．(査読有)

〔雑誌論文〕(計4件)

〔学会発表〕(計6件)

〔図書〕(計1件)

6. 研究組織

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。